

4 出土遺物

(1) 瓦磚類

今回の調査では古代から近代までの多くの瓦磚類が出土した（第3～5表）。軒瓦の出土量としては中・近世のものがもっとも多く、次に平安時代、奈良時代と続く。軒瓦の出土量としては少なくないが、時期ごとに見ると型式にまとまりを欠き、建物ごとの所用瓦や軒瓦の変遷等について、傾向を見出すことは難しい。以下、出土地区ごとに特徴的な軒瓦について述べる。

中室出土瓦 本調査では中室の北端（A区）と南端（B区）に調査区を設けているが、第21図のうち、1～7がA区から出土し、8～17がB区から出土した。そのうち、1～4・8～11が軒丸瓦、5～7・12～17が軒平瓦である。

1は興福寺の創建瓦である6301Aで、築地塀SA10971から出土。2は藤原宮式軒瓦の6271A。6271Aは平城宮およびその周辺では2点しか出土していないが、興福寺旧境内からは6点が出土している。石組溝SD10970から出土。3は東大寺式軒瓦の6235Jで、興福寺旧境内からの出土が顕著である。現代の遺物を含む土坑より出土した。4は平安時代の複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、石組溝SD7623から出土した。西室からも出土している。5は興福寺の創建瓦である6671A。6は6682Dで天平年間の所産。興福寺旧境内の各所から出土しているが、北円堂院からの出土が多い。7は「興福寺」銘をもつ軒平瓦で、鎌倉時代に属する。食堂などからも出土している。

8は平安時代の単弁8弁軒丸瓦で、外区に内縁に「×」文を施す。土坑SK10976から出土。9は平安時代末頃の二巴文で、石組溝SD7623から出土。10が中世の巴文で、11が近世の巴文。ともに

第3表 中室調査区（A・B区）出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数		
6235	J	1	6561	A	1	軒棧瓦	1
6271	A	2	6645	A	2	丸瓦（刻印）	13
6271	?	1	6671	A	6	丸瓦（ヘラ書）	4
6301	A	5	6671	L	3	平瓦（刻印）	12
6311	?	1	6671	?	1	平瓦（ヘラ書）	3
型式不明（奈良）	2	6682	D	1	鬼瓦（中世）	2	
巴（平安）	1	6682	G	1	熨斗瓦	19	
平安	12	6732	G	1	熨斗瓦（ヘラ書）	1	
古代	12	6739	A	2	面戸瓦	2	
巴（鎌倉）	1	型式不明（奈良）	1	伏間瓦	15		
鎌倉	2	平安	21	伏間瓦（刻印）	3		
巴（室町）	2	古代	9	鳥衾	2		
巴（中世）	8	鎌倉	21	目板瓦	5		
中世	20	室町	7	雁振瓦	2		
巴（近世）	3	中世	11	輪違い	1		
近世	21	近世	10	袖丸瓦	1		
近代	3	時代不明	1	掛け瓦？	1		
時代不明	10			水波文磚（緑釉）	1		
				特殊磚	1		
				隅木蓋	1		
				道具瓦（用途不明）	4		
				瓦製円盤	2		
				レンガ	1		
				凝灰岩	51		
軒丸瓦計		107	軒平瓦計		99	その他計	147
丸瓦	平瓦		傳	凝灰岩	レンガ		
重量	608.958kg	1452.693kg	0.257kg	147.969kg	0.74kg		
点数	3667	11283	2	137	2		

SK10976から出土した。12は奈良時代初頭の6561A。主に平城宮から出土するが、興福寺や薬師寺からも出土している。今回は土坑SK10972から出土した。13は藤原宮式軒平瓦の6645Aで、築地塀SA7620から出土。平城京内では1点を除くと、すべて興福寺旧境内から出土している（11点）。14は6671Lで、養老5年（721）～天平17年（745）ごろのものか。平城京内では興福寺旧境内からのみ出土する。SA7620から出土した。15は東大寺式軒平瓦の6732Gで、SD7623から出土。東大寺からの搬入品と考えられる。16は水波文を主体とすることから、室町時代のものか。土坑SK10974から出土。このほか、中金堂院や南大門からも出土している。17は近世の所産で、左右両端に引っかけをもつ。

経蔵出土瓦 遺構からの出土例は少な



第21図 中室調査区（A・B区）・経蔵調査区（C区）出土軒瓦 1：4

く、多くが遺物包含層からの出土である。18～20が軒丸瓦で、21～23が軒平瓦である。18・19は平安時代の複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、18は弁端が異様に広い点が特徴である。20は大きく「興」銘が記された軒丸瓦で、食堂などからも出土しており、鎌倉時代の所産である。21は6739Aで神護景雲年間（767～770）に属する。西隆寺所用瓦もある。

第4表 経蔵調査区（C区）出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数		
6301	A	1	6739	A	1	丸瓦（刻印）	3
6301	I	1	古代		5	丸瓦（ヘラ書）	1
薬師寺86		1	平安		3	平瓦（刻印）	26
平安		5	平安後期		1	平瓦（ヘラ書）	1
古代		6	鎌倉		5	鬼瓦	4
巴（鎌倉）		1	室町		7	熨斗瓦	6
鎌倉		2	中世		9	箱熨斗瓦	5
巴（室町）		1	法隆寺277A		1	面戸瓦	1
室町		1	近世		6	蟹面戸瓦	5
菊丸		1	時代不明		5	鳥衾	2
巴（中世）		17				目板瓦	2
中世		11				雁振瓦	2
巴（近世）		13				飾瓦	2
近世		9				道具瓦（用途不明）	5
巴（時期不明）		2				瓦製品（用途不明）	1
時代不明		12				土管	1
						凝灰岩	19
軒丸瓦計		84	軒平瓦計		43	その他計	86
丸瓦			平瓦			凝灰岩	レンガ
重量	299.276kg		633.916kg		0	58.995kg	0.136kg
点数	2569		7028		0	116	1

第5表 鐘楼調査区（D・E区）出土瓦磚類集計表

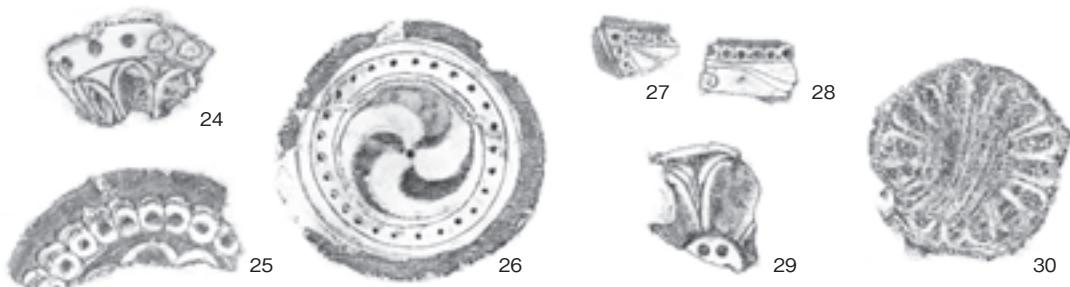
軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数		
法隆寺22A?		1	古代		2	丸瓦（刻印）	2
古代		1	平安		10	平瓦（刻印）	3
巴（平安）		1	鎌倉		3	平瓦（ヘラ書）	1
平安		9	近世		2	割熨斗瓦（中世）	1
巴（鎌倉）		1	時代不明		5	面戸瓦	9
鎌倉		2				蟹面戸瓦（古代）	2
巴（中世）		3				鳥衾（中世）	1
中世		3				道具瓦（用途不明）	5
巴（近世）		1				土管	1
巴（時期不明）		1				凝灰岩	7
時代不明		13					
軒丸瓦計		36	軒平瓦計		22	その他計	32
丸瓦			平瓦			凝灰岩	レンガ
重量	127.643kg		305.937kg		0	51.784kg	0
点数	1067		3625		0	171	0

ある。22は唐草文を主文様とする平安時代のもの。23は蓮華文系の中心飾りをもち、17世紀後半のものと考えられる。法隆寺において同范品の使用が確認されている（277A型式）。

鐘楼出土瓦 鐘楼では西北隅（D区）と東南隅（E区）に調査区を設けている。24～28がD区から出土し、29・30はE区からの出土である。24～26・29・30が軒丸瓦であり、27・28が軒平瓦である。24は平安時代の単弁蓮華文。25は平安時代の複弁蓮華文で、薬師寺に類例が認められる。26は中世の巴文で、巴の中心に珠点をもつ。27・28は同一個体ではないが、同一型式と考えられる。平安時代のもので、珠点の施文方法に特徴がある。なお、26～28はD区西北隅から出土した。

29は破片ではあるが、法隆寺における22A型式（法隆寺昭和資財帳編集委員会『昭和資財帳15 法隆寺の至宝 瓦』小学館、1992）と同范の可能性が高く、その場合、7世紀後半に遡る可能性がある。30も平安時代のものだが、瓦当面に糸切り痕が明瞭に残っており、粘土から切り出した瓦当面に瓦範を押しつけている状況が確認できる。

（林 正憲）



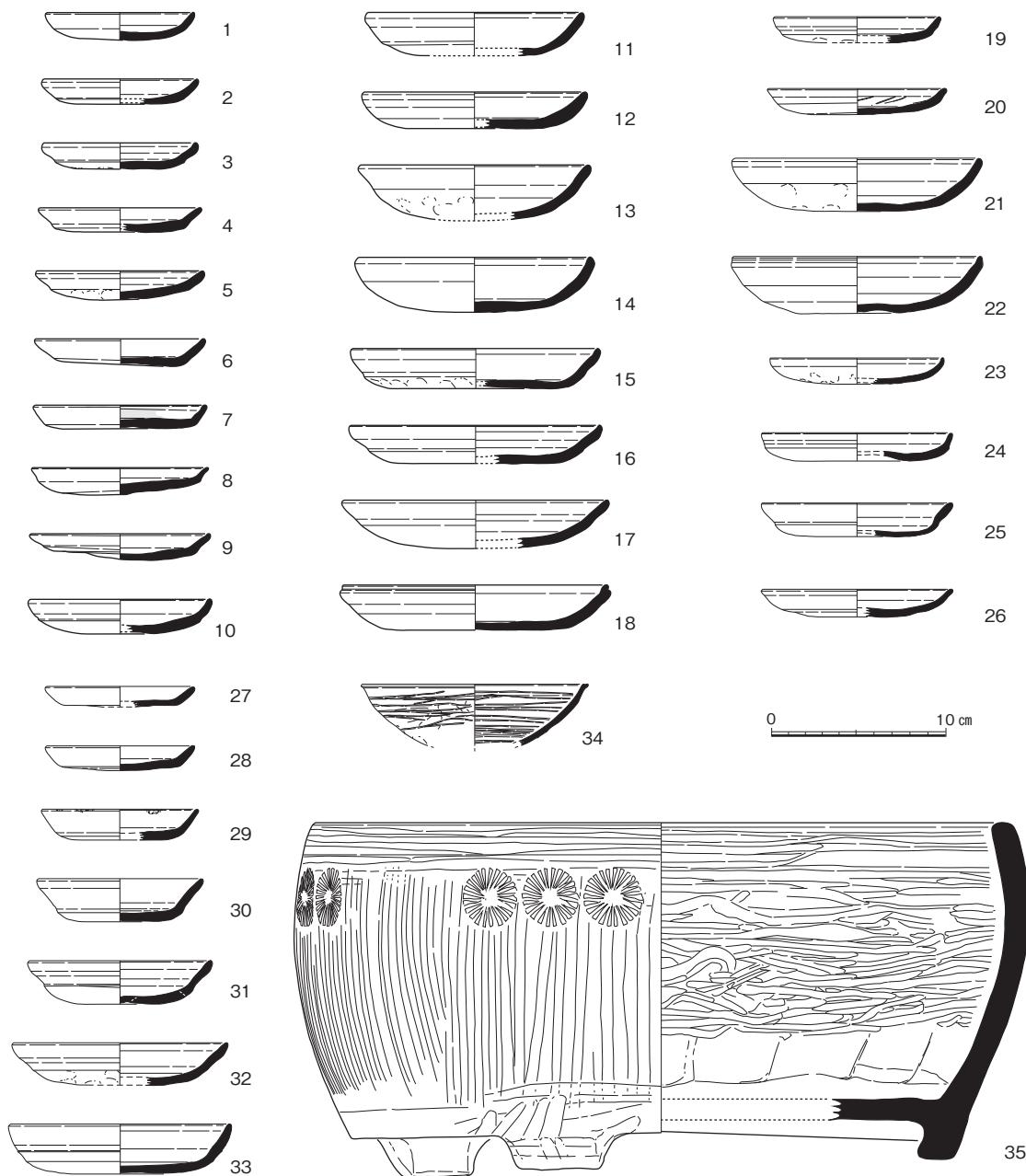
第22図 鐘楼調査区（D・E区）出土軒瓦 1：4

(2) 土 器

奈良時代から近代にいたる土器、土製品、陶磁器が、整理箱で20箱分出土した。古代の土器は少なく、鎌倉時代以降のものが主体的である。

第23図－1～18は、C区の土坑SK10986出土。口径8～11cmの小皿（1～10）と12～13mの中皿（11～14）、14～16cmの大皿（15～18）からなる。

小皿は上段のナデが形骸化しているが、中大皿は2段のナデを施すものが主体的である。これら皿の口径分布と調整技法は、興福寺一乗院の調査で検出した土器堆積層SX8200中層・下層出土土器（次山淳ほか「興福寺一乗院跡の調査—第328次」『奈文研紀要2002』）と近似しており、12世紀後半頃と推定で



第23図 中室・経蔵・鐘樓出土土器 1：4

きる。

19～22はA区中室大房SB7590の基壇上で検出した小穴から出土。口径9～11cmの小皿（19・20）と14～15cmの大皿（21・22）がある。小皿、大皿ともに2段ナデが主体的であるものの、口縁端部は外反するものではなく直立する特徴は、旧大乗院庭園で見つかった土坑SK8982出土品（高橋克壽ほか「旧大乗院庭園の調査—第390次」『奈文研紀要2006』）と似ており、12世紀前半に位置付けられよう。

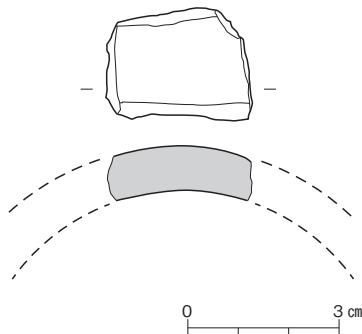
23～26はB区中室大房SB7590の南側柱列付近の遺物包含層から出土した土師器皿。口径9～11cmで、いずれも口縁部外周に1段ナデを施す。口径と調整技法から13世紀中頃～14世紀前半頃のものとみられる。

27～34はA区の土坑SK10966から出土。27～29は口径9cm前後の浅手の小皿。30・31は平底から直線的に口縁部が立ち上がり、やや器高も高い。32・33は口径11～12cmの大皿。器高が高い一群があることや、口縁端部の形態は、旧大乗院庭園で見つかった土器溜りSX8829（大林潤ほか「旧大乗院庭園の調査—第374次」『奈文研紀要2005』）の土器に近似することから、13世紀中頃から後半に位置付けられよう。34は瓦器椀だが、高台を欠くが口縁部の特徴などから、川越編年（川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢III』奈文研、1983年）の第Ⅲ段階C型式に比定でき、土師器皿の年代と整合的である。

35はA区中室大房SB7590の北面基壇外側で見つかった瓦質土器の円形火鉢。ほぼ完形に近い状態で廃棄されていたが、底部を欠く。口径40cmに対し、器高が17cm（脚部を含めると19.5cm）とやや高い。体部外面を縦方向に丁寧に磨き、口縁端部付近は横方向に磨きを加え、菊花文の押印を施す。押印は、割付が不均等で、3個連続のところと2個連続の部分がある。内面は、下部で板状工具のナデが残るが、口縁部から3分の2程度は、粗いものの横方向の磨きが加えられる。器形、調整から、瓦質火鉢の中でも、やや古相の様相を呈するとみられ、14世紀頃のものであろう。
（神野 恵）

（3）金属製品

銅製品 風鐸片、円環状金具、細板状金具、キセル雁首がそれぞれ1点ずつ出土した。第25図は、風鐸片。厚さ約1.2cmの鋳造品と考えられ、内外面は平滑である。四辺は欠損するが横断面形は弧状



第25図 C区出土風鐸片 2：3

第24図 A区（中室北側）出土瓦質円形火鉢

をなしており、復元外径は約10.0cm、内径は約8.7cmで、小型風鐸の可能性がある。C区北部の遺物包含層出土。円環状金具は径約2cm、厚さ0.2cmの小型品。C区経蔵SB11000の基壇外装抜取溝出土。細板状金具は長さ12.7cmで、一端が尖り他端が刺叉状をなすもの。A区表土出土。キセル雁首はD区の遺物包含層出土。

鉄製品 角釘19点、丸釘3点、鎚4点、座金具1点、環状金具1点、U字形金具5点などが出土した。角釘は大半が小片だが頭部形状が判別できるものに折釘、頭巻釘が1点ずつある。これらはC区経蔵SB11000の基壇外装裏込土、B区の築地塙SA10971掘方、C区の瓦溜SX10982、A区中室大房SB7590やC区経蔵SB11000周辺の遺物包含層などから出土した。鉄鎚は、D区鐘楼SB11010の基壇西面の上層焼土を掘り込む小穴、D区の遺物包含層などから出土した。

(4) 冶金関連遺物

鋳型片2点、羽口片2点、銅滓片1点が出土した。鋳型片は2点とも真土の表面が被熱により黒色化しており、表面は弧状を呈する(第26図)。B区の土坑SK10972より出土。羽口片は、復元外径がそれぞれ8.3cm、7.2cmで表面は被熱により黒色あるいは灰色化する(第26図)。B区南部の築地塙SA10971掘方出土。銅滓片はA区北部の遺物包含層出土。

(5) 植物遺存体

C区土坑SK10986の炭層から炭化植物遺体が出土した。土坑中より採取した500mlの土壤中から1mm目の籠で回収した植物種実は、炭化米208点(破片148点)(第27図)、炭化アワ1点、不明炭化種子1点である。炭化米はすべて胚が欠けており断面形は丸みをもつ。炭化米を無作為に50点抽出した計測値は、長 4.34 ± 0.30 、幅 2.48 ± 0.15 、厚 1.75 ± 0.15 であり、粒型(長/幅) 1.75 ± 0.14 で短中粒、大きさ(長×幅) 10.79 ± 1.09 で小型に分類できる(粒型と大きさの基準は、松本豪「日本の稻作遺跡と古代米に関する研究」『大阪府立大学紀要』vol.46、1994年、135-194頁による)。

(芝 康次郎)



第26図 B区出土冶金関連遺物

第27図 C区土坑10986出土炭化米 10:1